

13. 源之助・仲治郎兄弟が渡米にいたるまで

『水産調査報告（第三卷）第壹 第貳冊』（農商務省水産調査所 明治 28 年）の水産調査所第一部主任 農商務技師・岸上謙吉の論文「あわび研究第一報」には「外國ニ於ケルあはび漁業」という重要な小論があり、源之助や仲治郎は熟読して、調査研究のきっかけにしていた可能性がある。

そこには「あわびハ七十餘種アリ東洋、南洋、歐洲、及ビ北米太平洋岸ニ饒産ス…北太平洋岸ニテハ桑港近傍トス…米國水産調査報告ニヨルニ北太平洋沿岸ノあわび漁業ハ千八百七十九年ニハ肉及ビ介殻ヨリ十三万弗許ノ収獲アリ…千八百八十八年ニハ其収獲實ニ三百万弗ニ達セリ、然レドモ志那人ノ貪慾ナル濫獲シテ遂ニ諸所ノ漁場ヲ荒廢ニ歸セシメタリト云ウ、同國ニテハ介殻ノ方肉ヨリモ貴シ、千八百七十九年ノ報告ニヨレバ介殻ノ一噸四十弗及至九十弗、肉ハ一磅凡ソ五仙ノ割合ナリト云ウ、要スルニ外國あわび漁業ハ未ダ幼稚ニシテ捕獲法等ニ至リテハ未ダ本邦ノ右ニ出ヅルモノナキガ如シ、種類ハ本邦産ノモノト異ナレリ。明治廿七年十一月」という内容である。このなかで注目されるのが「北太平洋岸ニテハ桑港近傍トス…米國水産調査報告ニヨルニ北太平洋沿岸ノあわび漁業」という部分であり、岸上がいつている「米國水産調査報告」が存在するとなれば、当然、源之助や仲次郎らが目を通して、渡米後の調査研究に活用したはずである。今のところ、この報告書と思われる日本側のものは発見されていないが、今後、源之助と仲治郎の渡米前後の歴史的な事実をさぐるうえで、欠かせない資料の一つになるかもしれない。

これまでの源之助や仲治郎らが渡米した前後のことは、アメリカ側からの資料や聞き取り証言、あるいは日本人が書いた移民に関わる米国見聞録などで調査研究がおこなわれてきた。なかでも源之助や仲治郎らが渡米した経緯を取り上げている大場俊雄著『房総の潜水器漁業史』（崙書房ふるさと文庫 1993 年）の「VI. カルフォルニア州へ伝播した潜水器漁業技術」の項は基本的な文献である。

そのなかでは渡米に関わって取り上げられている人物が「野田音三郎」である。野田は 1864（元治元）年に佐賀県牟田辺村の石井家に生まれ野田林右衛門の養子となっている。1889（明治 22）年渡米、サンフランシスコに上陸し、各種農園作業や山林開墾事業に従事するも、劣悪な労働環境を改善するため労働団体を結成するなど、日本人労働者の地位向上と職場の開拓に務めたという。その後、開墾事業を続けながら 1898（明治 31）年モンレー湾で日本人による本格的な漁業を開始し、乾鮑や鮑缶詰など加工品の製造に取り組んだ。日本が日露戦争に勝利した 1905（明治 38）年頃から排日の動きが高まると、各地方にあった在米日本人協議会を連携させ、在米日本人協議会を結成するとともに、代表としてワシントン駐在大使青本周蔵に面談して排日問題の解決を働きかけるなどに尽力した。1913（大正 2）年、カリフォルニア州日本人中央農会が設立されると会長に就任し、稲作にも取り組んでカリフォルニア米生産への道を聞いた。1915（大正 4）年、サクラメントにおいて 52 歳で死去した。（参考・佐賀県人名辞典・佐賀県電子書籍ポータルサイト）

野田のことでは大場俊雄も引用しているのが『在米日本人史』（在米日本人会・1940（昭和 16）年）である。ここには「…1898（明治 31）年モンレー地方の農業開発者野田音三郎は、試みに一船を浮べて日本流の『ハエナワ』を使用して見たところ非常の好果を挙げたので、漁業に従事する事になった。…採鮑業方面に於ても野田音三郎は其元祖であつて、1899 年頃より採鮑を試み干鮑として支那輸出を図つた。折柄加州は干鮑を法律を以て禁止したため罐詰に代へたるも販路少なく失敗であつた。其後採鮑業は井出、森等を経て小谷兄弟の白人と提携して調査と研究とを重ね、漸く収支相償ふに至り採鮑区域を拡大するに至つた…」という。

「…1895 年（明治 28 年）モンレー市に近いカーメルのポイントロバスでは邦人の手による採

鮑業が営まれていた。恰もこの事業は当時加州在留同胞指導者の一人であった佐賀県人野田音三郎が画策創始したもので、野田は 1895 年、太平洋開発会社の所有に属する森林の伐採並に薪切りの為、ワツソビルより菅野・今城の二邦人を同伴してモントレイに赴き、彼らと前後して伐採の為に到着した和歌山県人の漁師六七名と共同して、小規模な漁業を始め、半漁師、半伐木者として過してみたがその中に井出百太郎なる者も一行に加つて専ら食料供給を担当するに至り、野田は翌 1896 年採鮑業の有望なるに目を着け、井出と諮つて日本より専門家を呼び寄せることとし日本で諸準備と機械の買付け等を磯部小哉に依頼した。磯部は農商務省へこのことを相談に及んだので、農商務省では当時千葉県にみた小谷源之助にこれを通じて渡米を促し、(小谷は当時千葉県で潜水機を以て採鮑業を営んでみた)小谷は早速渡米し 1896 年 10 月モントレイに来つて野田と協力することになったのである。兩人協力の採鮑業には日支人多数の漁夫が従事し、鮑は乾燥して日本にも送り、百斤(16 貫目)を 32 円(米貨 16 弗)で売買し、その業績は良好であった。然るに其後に至り野田と井出との協力作業は分裂し井出はポイントロバスに採鮑業を起し、日本より潜水機並に漁師を呼び寄せ、野田も亦日本より漁師を雇って事業を拡張し、茲に於て兩人は対立するに至つたが、井出は資金つづかず、1898 年頃より桑港の森肇の融資によつて事業継続を図つたが遂に及ばず、ポイントロバスに於ける井出の採鮑業は、森及び野田の協力者小谷の手によつて経営されることとなつた…」とある。

ここで重要な一文が「…井出と諮つて日本より専門家を呼び寄せることとし日本で諸準備と機械の買付け等を磯部小哉に依頼した。磯部は農商務省へこのことを相談に及んだので、農商務省では当時千葉県にみた小谷源之助にこれを通じて渡米を促し…」という部分で、農商務省への相談した人物が「磯部小哉」という。この人名は大場俊雄の調査で間違いとわかっており、正しくは「磯部水哉」とされているので、後述する井出百太郎とともに磯部水哉も取り上げる。

『在米成功の日本人』(櫻府隠士著・1904(明治 37)年)をみると、「…住居はモンリオールの灣に瀕して居る所から、豫て農事の傍ら小仕懸の漁業を営んで見たが、三四年前から採鮑業を始た。是は勿論重に白人の資本でやつて居るのだが、鮑を採り之を罐詰にし之を口ぐ事等主として音次郎が採配を揮て居る。而してモンリオール灣の附近は西班牙人の多く土着して居る所であり、半農半漁の貧民が澤山ある所から、年々州會でも開ける頃になるとモンリオール郡選出の西班牙人なる議員に由て彼等と貧民は毎度の様に日本人の漁業を排斥する運動を始めるが、之に對して野田等は其都度機敏に熱心なる運動を爲し、今尚日本人の漁業権を保ち續て居る。斯て此頃では野田等の關係をして居る會社の鮑の罐詰はドシドシ布哇にまで賣て行く…」と、日本人排斥への対応が描かれている。

また野田の家族関係では日本でのネットワークに関して、「…野田の配偶は紅葉館の愛娘である。人も知る如く同館は華族連の共有のやうに成つて居るが、之を預つて管理して居るのは野邊地翁である。翁は多分會津藩のチャキチャキであつたらうが、餘暇健康躰と見え子實が頗る多い。勿論腹は或は異りもしやうが、上の方に男子がありて歐羅巴に住いて居るやうだが、下の方は皆女子だ、夫れで中程にマスエとか云のがある。虎の門の東京女學館で勉強して、音樂や料理は勿論佛蘭西語なども一應出来る。佛蘭西語は天主教宣教師の學校で學だ様に聞て居る。野邊地翁はマスエにも其妹連にも皆一通り佛蘭西語を修業させて交際場裏に立得る準備をさせる。用意周到と云ふべしだ。斯くてマスエは良縁を得て寫眞の見合で遂に音次郎に嫁ぐこととなり、卅三年の夏高平公使の一行と同船にて渡米した…」という。これらの状況が事実であるとするならば野田音三郎は妻の実家からの人脈を使えば、政府要人を通じて農商務省との交渉は可能だといえた。

1918（大正7）年頃、安房郡七浦村千田で書かれた『紀念記録書』という小冊子がある。ここには「明治二十九年極月中亞米利加合衆國キヤリフォルニア州モンレー郡ロバートサイドに鮑採取業經營スベキ希望者静岡県井出村井出百太郎ナル者小谷兄弟諸水産物奇製ノ妙實ナルヲ傳知セラレ依テ經營試験的小谷氏兄弟ヲ技手者トシ井出氏ヨリノ層托ヲ受ケラレ鮑採取労働者トシテ安田市之助、山本林治、安田大助右三名被雇サレ安房郡内ニテ渡米者ノ端緒デアツタ」と書かれている。

この小冊子によれば、カリフォルニア州日本人鮑漁業創始時の井出百太郎と小谷兄弟の繋がりは、明治29年12月にアメリカ合衆国カリフォルニア州モンレー郡ロバートサイドで鮑漁業經營を希望していた井出が、小谷兄弟の諸水産物加工技術に優れ確かなことを伝え知ったので、試験的に小谷兄弟に技術者、援助者になるよう依頼すると共に、鮑採り労働者として安田市之助ら3名を雇ったことが安房郡内の渡米者の始まりであるという内容である。磯部水哉や農商務省の関わりについては触れられていない。

大場俊雄「米国アワビ漁業の経営者、井出百太郎」（『地域文化研究』八戸工業高専 地域文化研究センター・2010年）を参考に静岡県出身の「井出百太郎」という人物をさぐってみる。井出は野田がカリフォルニア州で始めた鮑漁業に構想段階から関わり、一緒になって取り組んだ。そして井出の知り合いの磯部水哉の仲介によって農商務省が小谷源之助に渡米を促し、源之助・仲治郎兄弟と素もぐりの男海士3人が渡米することになった。野田と井出は小谷兄弟や男あまが現地到着後、日本人による素もぐりでの採鮑業と乾鮑加工業を始めたが、明治31（1898）年9月末頃、素もぐりに続いてヘルメット式の潜水器械を導入して採鮑漁を始め、身は乾鮑に加工し、殻は装飾品として販売していった。井出はモンレーにおいて採鮑業や鮑加工業の井出水産部を設置し、米国人の鮑保護や採鮑漁禁止運動に抗して操業していたが、結局上手くいかずモンレーから撤退し、サンフランシスコの井出商店經營に専念した。だが、サンフランシスコ地震の被害で帰国したものの、今度は関東大震災によって行方不明になったと伝えられている。

井出百太郎は、1867（明治元）年静岡県の大淵村で後藤善藏の二男として生まれ、1878（明治9）年に井出角十の養嗣子となっている。外国語に熱心な教育を進めていた静岡県尋常中学校に入学すると、アメリカ人教師との交流を深め、卒業している。そして、1890（明治23）年に初めて渡米して以来、明治25年、27年、29年、31年、34年と計6回旅券が付与され、当時として米国へは頻繁な往来をしていたといえる。そして、1892（明治25）年に井出はサンフランシスコ市第6街201番に井出商店を開いている。『在米日本人年鑑』（明治39年）は「二十五年今の井出商會ハーワード街と第六街の角に設立された」と記載され、『現代人名辭典』、『東京社會辭彙』、『大正人名辭典』にも明治25年サンフランシスコに雜貨店を開業と書かれている。その後、市内の第6街からバッテリー街に店舗をかえて營業し、日本には東京日本橋区小舟町1丁目6番地や神戸栄町6丁目48番館に出張所を置き、様々な輸出入品目を扱っていた。

採鮑漁業に関わった経緯は、前述の『在米日本人史』で取り上げたように、佐賀県出身の野田が1895（明治28）年、「…モンレーに赴き、彼らと前後して伐採の爲めに來着した和歌山縣人の漁師六七名と共同して、小規模な漁業を始め、半漁師、半伐木者として過してみたがその中に井出百太郎なる者も一行に加つて…野田は翌一八九六年採鮑業の有望なるに目を着け、井出と諮つて日本より専門家を呼び寄せることゝし…」とされる。野田と井出はカリフォルニアで鮑漁業を始めるに当たり、日本での諸準備と機械の買付け等を磯部水哉に依頼し、磯部は農商務省へ相談にいったことが前述の『在米日本人史』にある。磯部は井出と同じく静岡県人であり、井出より12歳年上で、東京市芝区や日本橋区に住み、1879（明治12）年22歳のときに上海に、1881（明治14）年24歳のと

きに再び上海に商用で渡航しているという。そして磯部は井出とともに 1898（明治 31）年、旅行目的を商業とする合衆国行き旅券交付を受け、一緒にモントレイに出向き採鮑漁や鮑加工業を進めることになったと推察される。

磯部が農商務省へ行って相談すると専門家を派遣するとなり、その専門家は源之助になったという。源之助は 1897（明治 30）年 9 月 9 日に渡航主意水産業調査、渡航先桑港という旅券を得て、9 月 14 日に汽船ドーリックで横浜港を出航し、9 月 29 日サンフランシスコに到着して、12 月 3 日には仲治郎と男海士 3 人が渡米し源之助と合流したのである。こうして潜水器採鮑漁技術と乾鮑製造技術を身につけた千葉県からの専門家や海士は、野田や井出のもとで鮑漁業と加工業に従事することになった。

サンフランシスコで井出商店を経営していた井出は、採鮑漁業を新規事業にし、井出水産部をモントレイに設置した。日本人が採鮑漁を始めると、モントレイ郡の人びとから鮑の獲り過ぎによる絶滅を憂える声があがり、そのことでの新聞報道もあった。井出百太郎を紹介する『日本現今人名辞典』（明治 33 年）には、明治「三十二年四月米國加州の縣會に於ひて井出水産部漁業禁止案の下院を通過したるも氏の反對運動の結果なりと云ふ此年七月又モントレイ郡會に於て加州縣會に提出せしも此れ又氏の反對運動によりて法律とならず一ヶ年米金六十弗（日本金百二十圓）の税金を郡に仕拂ふ事に修正せられたし」とあるので、採鮑漁を始めて間もなく鮑漁業禁止や鮑の郡外搬出禁止を主張する米国人の動きがあったのだろう。結局は、1900（明治 33）年頃に井出は潜水器採鮑漁業や乾鮑加工業をやめるが、『在米日本人史』には、井出は資金がつかず、ポイントロバスにおける井出の採鮑業は、サンフランシスコの森俊肇と小谷源之助の手によって経営されたと記された。サンフランシスコの森とは、井出の跡を継ぎ潜水器採鮑漁業や乾鮑加工業経営に参入したサンフランシスコデュポント街 527 番の森合名会社の経営者であった。

大場俊雄「米国でアワビ潜水漁業、干鮑加工業を営んだ護俊肇」（『地域文化研究』八戸工業高専地域文化研究センター・2013 年』を参考にサンフランシスコで森薬舗を経営していた「森俊肇」を紹介したい。護俊肇は、1900（明治 33）年頃、モントレイで野田音三郎や井出百太郎から鮑事業を引き継ぎ、源之助・仲治郎兄弟の潜水器採鮑を支援した人物である。「護」の宛名で「小谷」宛への 25 日付書簡【174】がある。「…御養生専一に遊さるべく候…米国より書面には、三月末か四月上旬には、帰朝する様申参り候ニ付、一寸御通知申上候…」との内容だけで護俊肇を差出人とできるか。書簡の「御養生専一」との御見舞い言葉は誰にむけたかを推察すると、やはり 1907（明治 40）年 3 月「脳症」で村議を辞職した清三郎に向けたと思われ、護俊肇が御見舞いと帰朝の挨拶をしたものであろう。だが、源之助の弟小谷寿一の就職について、なぜか触れられていない。

寿一の清三郎宛ての書簡【21】の内容は、石田トミと結婚した寿一が夫婦で渡米して護俊肇経営の森薬店に勤めることになるが、渡米の手続きを報告している。「トミ入籍之義ニ付種々御心配…謹啓 兼ねて御送附方相願へ置き候膳本、本日正ニ落手仕候間御通知…本日直々東京府ニ向へ提出…森氏之証明書には渡航費用一切を支給し呼寄候旨記入之あり…其筋より其等の件に付き取調…在京護夫人迄で届き…渡米之節ハ同人より受取る様…又川名方にて目下売薬商見習い中…」とある。寿一はトミと結婚し入籍したのが 1907（明治 40）年 1 月である。渡米にあたり書類や連絡などは在京していた護夫人が関わるとともに、渡米費用を一切負担してもらい、4 月 18 日に日本を離れた。そして、仲治郎の清三郎宛 6 月 29 日付書簡【222】では「…寿一事海上無事着米被致候趣き、安心仕り候、実ハ時節柄如何かと案じ居り候処、差支へなく上陸致し候義、誠ニ幸福ニ奉存候…宛名ハ森薬店方と致し置き候…」と、当時、排日風潮が強まり移民が難しくなっているなかで、寿一・

とみ夫婦が無事、サンフランシスコに上陸し森薬店に着いたとの報告を受け安堵している。

ところで、柏村桂谷著『北米踏査大観』(1911(明治44)年)によると、護俊肇の経歴は滋賀県長浜出身の1860(万延元)年生まれであるが、1885(明治18)年渡米し、ホテルや葡萄酒醸造場で真面目に働いた結果、まだ排日の風潮もない時期であったので、重要な任務に付き特別の収入を得たという。そこで貯蓄した資金で日本に材木輸出事業をおこなうものの失敗に終り、再び猛烈に働き古着類及び時計などを扱う仕事で資金を貯めると、海産物事業が儲かるということで小谷源之助とともに、モントレイ付近で採鮑事業に取り組んでいったという。しかし、馴れない海産物事業も不調になり撤退して、当時サンフランシスコの日本人社会には薬舗がなかったので開業したと述べられている。

だが、実際は旅券下付記録から渡米は1897(明治30)年12月24日であり、後の出版物が「森薬店」開業を翌98年とし、住所はサンフランシスコ・デュポン街527番地となっている。数年後の日系新聞広告では「森薬舗」と改名し、引き続き「森」を商号としていた。薬舗経営をしながら護俊肇は、1900(明治33)年にモントレイの採鮑業や鮑加工事業を井出商会から買取り、森合名会社水産部を設立した。だが日本への乾鮑輸送に失敗して2年も経たないうちに撤退することとなり、銀行家で地主であったA. M. アーレンの支援を受けていた源之助仲治郎兄弟が引き継いでいったのである。